

テキスト：Italo Moscati

出展：“Senritsumirai: Futuro Anteriore Arte Attuale Dal Giappone” Catalogue. Published by Centro par l’arte Contemporanea Luiji pecci, Prato, 2001

翻訳：ChatGPT

今日の日本美術に捧げられたこの展覧会のタイトルは、美しい。「Senritsumirai — Future Perfect（未来完了）」。

「Future Perfect（未来完了）」——それは思索を促す言葉であり、ほとんど魔法の呪文のように響き、私たち一人ひとりの内に、ほんのひととき、あるいは永遠に存在していたかもしれない何か神秘的なものをほのめかしている。

本展の内容そのものについて論じることは、私の役目ではない——その責任は別の人気が担うだろう。本展は、日本の写真家・荒木経惟の作品を紹介した展覧会に続くものである。花や、とりわけ苦悩あるいは歓喜に満ちた身体を写した荒木のイメージは、アイロニカルでありながら悲劇的でもある人生観を伝えてきた。全面的に自由な精神を要求するがゆえに受け入れがたいこの選択こそが、荒木に議論を引き起こさせ、今なお議論を生み続けさせている理由だったのかもしれない。だがその論争も、やがては単なるスキャンダルの外観以上のものではなくなり、消え去る運命にある。

事実、私は長年、日本文化に惹きつけられると同時に、不安を覚えてきた。そこには、過去と未来のあいだに保たれる、常に危うい均衡があるからだ。都市から人々の衣服に至るまで、あらゆる意味で現在はその両方を吸収しながら進んでいる。しかし何よりも私をとらえて離さないのは、かつて黒澤明の映画『羅生門』に心を奪われたときと同じ感覚である。この作品は1950年代にヴェネツィア映画祭で金獅子賞を受賞した。私がそれを観たのは、ジャン＝リュック・ゴダールやヌーヴェル・ヴァーグの監督たちに率いられた前衛映画の波がすでに世界を席巻していた頃である。その波は、必ずしも同じ水準にあるとは言えない数多くの模倣を生み出すことになる。

黒澤の映像において私を打ち、そして今なお打ち続けるのは、真実を暴き出そうとするきわめて現代的な関心を、明晰かつ強烈に表現するその力である。確かにつかんだと思っても指の間からすり抜けていく、事物や思考の揺らめき。あのとき以来、私は映画、文学、演劇、美術といった、日本から生まれるあらゆるものに魅了され続けてきた。それは単なる実存的不安を超える、記憶を失い、無制限の近代的消費へと身を投じた社会の新たな風景に対する漠然とした驚きを超えていく力を持っていたからである。

しかし、もう一つ理由がある。日本の探究は容赦なく、しばしば驚きをもたらすものであり、そのたびに判断や偏見を再検討せざるをえなくさせるからだ。いま、遠い未来に満ちた『Senritsumirai』の提案を前にして、私は同じように情熱的な関心の姿勢を取らずにはいられない。

まだ設営中の展覧会について語ることは難しい——不可能と言ってもよいかもしれない。重要なのは最終的な「スペクタクル」だからだ。もっとも、この語は私の言いたいことを正確には伝えない。こうした機会にセンターの部屋から部屋へと移動しながら、自らが一つの旅の途上にあることに気づき、その道行きがやがて個人的な映画へと変わっていくことを知る者であれば、理解してくれるだろう。

『Senritsumirai』は、私がセンターの会長を務めた三年半を締めくくる展覧会でもある。「Future Perfect」という言葉を含むこのタイトルを持つ展覧会以上に、物事に終止符を打ち、別れを告げるにふさわしい方法を、私は思い描くことができない。この言葉は偉大な精神分析家ジャック・ラカンの思索に由来する。昨日と明日という二つの顔を持ち、今日という時間が刻々と過ぎていく現実。

それは、飽くなき真実への渴望の象徴である——私の、そして私たちの、愛すべき『羅生門』と同じように。

Italo Moscati

President of the Centro per l'Arte Contemporanea Luigi Pecci in Prato